

コラム 20 — 日露戦争を戦った日本人

<旅順港閉塞作戦>

開戦当初、日露戦争は大陸に増強されているロシア軍と戦うためには、まず、日本陸軍を大陸に送り込むための海路を確保することと、これら陸軍への補給支援のための海上交通路を確保することが、まずは最優先された。このため、東郷艦隊はロシアの極東艦隊(写真)を撃滅し、制海権を獲得する必要がありました。しかしながら、



ロシア極東艦隊

19万トンというロシア極東艦隊の大兵力はほとんどが旅順港に入っていて出てきません。そこで「旅順は閉塞する以外にない」という非常作戦が考え出されました。この旅順港閉塞作戦を唱えたのが戦艦「朝日」の水雷長、広瀬武夫少佐(写真)であります。この作戦は多くの犠牲を伴う作戦であり当初、東郷司令官は反対するが広瀬の情熱によって実行されることとなります。総人員は士官である指揮官、機関長をのぞくと67人が必要でありました。下士官以下の人員はひろく艦隊から志願者をつのりました。



広瀬武夫海軍少佐

たちまち2千人以上が応募したため、広瀬を驚かせました。なかには血書をして志願する者もいました。このとき、ロシアの駐在武官を経験した広瀬はロシアの軍人と日本の軍人を比較し、「日本人は1人1人が命がけで戦っている。これは国民戦争だ。このいくさは日本が勝つ」と東郷艦隊の参謀である秋山真之にいいました。かくして、旅順港閉塞作戦は1904年2月24日に決行されることとなります。指揮官有馬良橋中佐(写真)の乗る「天津丸」を先頭に、広瀬の「報国丸」以下5隻で行われましたがロシア軍の湾口の砲台からの砲撃によってほとんどが手前で自沈せざるを得ず、第1回目の閉塞は失敗に終わります。かくして、第2回目の閉塞作戦が3月27日に再び有馬を総指揮官として決行されますが、この作戦も結局は失敗に終わります。この時、閉塞船「福井丸」に乗って進出した広瀬武夫は、この作戦で部下である杉野兵曹長を船が沈むぎりぎりまで探しますが見つからず、ボートに乗り込んだ直後、敵弾が広瀬の体に命中し戦死します。このときの広瀬中佐の指揮の状況について、触れたいと思います。



有馬良橋海軍中佐

広瀬が指揮する福井丸が、湾口付近に近づいたとき、探照灯に照らし出された福井丸に要塞砲が集中します。広瀬は、福井丸を沈めるための処置をして、

全員がボートに移り退艦しようとしたとき、広瀬の部下である杉野兵曹長がいなことに気づきます。広瀬は益々激しくなる敵弾の中で、「杉野、杉野」と叫びながらボートと船内を3度も往復したと言われていました。いよいよ福井丸が沈む段になり、やむなくボートに乗り移ったとき、敵の砲弾が広瀬に命中、ひとかたまりの肉片と血だらけの海図を残して、広瀬の姿は消えたのです。このときの広瀬の血痕が、部下の外套にふりそそぎ、その外套が今も広島県江田島市にある海上自衛隊教育参考館に、納められています。

この広瀬中佐の胆力と部下との心のつながりは、広く世に広まり、広瀬中佐は、日本で最初の軍神になります。

<南満州での沙河（しゃか）会戦>

1904(明治37)年10月、沙河会戦が生起します。この会戦で日露戦争に初めて参加した弘前第8師団長の中将立見尚文は、以前、西南戦争の時に紹介したように、三重県桑名藩出身の極めて優れた野戦指揮官であります。立見は、満州軍総参謀長の児玉源太郎大将に沙河会戦でこの弘前師団が参加したことは、この作戦の勝利の大きな要因になったといわしめました。また、特に第8師団を満州平野でつかうか、旅順でつかうかについて明治天皇の決断を仰いだこともあり、児玉は大本営に対し、「聖断の明に感激する所なり」と異例の電報を打ったほどであります。

さらに、この沙河会戦で特筆すべき人物に第1騎兵旅団長の秋山好古少将(写真)の活躍があります。秋山好古は松山出身であり、海軍の秋山真之(写真)の実兄であります。日本陸軍の騎兵の生みの親ともいわれております。秋山好古は騎兵術につ



秋山真之海軍中佐



秋山好古陸軍少将

いて仏で学びます。このとき、ロシアのコサック騎兵は人馬ともに大きく、とても1対1では日本騎兵は勝てないという判断のもと、好古が考えた戦法は織田信長が長篠(ながしの)の合戦において武田の騎馬隊に対してとった戦法であります。すなわち、秋山の騎兵は戦闘開始とともに騎兵はいつせいに馬からおりて騎兵ではなくなります。

そして、騎兵隊には、仏から輸入した最新の機関銃を持たせて伏射の姿勢をとって歩兵になります。しかも、秋山は騎兵というものは宿命的に防御力が弱いため、つねに歩兵部隊を軍から借り、それを展開させました。さらに、コサック騎兵を打ち砕くには、これだけでは足りない、砲兵部隊も借りています。その砲兵がすぐさま運動を開始し、後方で砲列を布き一斉に砲弾をコサックの頭上で炸裂させることによって、その集団をかきみだすというものでありまし

た。これら 3 種類の兵種がまるで 1 つの機械のように作動しているのが秋山支隊であるといわれていました。当時世界最強の騎兵といわれていたあのナポレオンをもうち破ったコサック騎兵は伝統的な乗馬突撃によって、何度もピストン攻撃をかけてきたが、その都度秋山好古が考案したこの防禦射撃陣形で、コサック騎兵を粉砕しました。特に秋山支隊の機関銃は大きな威力を発揮し、沙河会戦の勝利に大きく貢献しました。

<日本海海戦>

日本陸軍は、大きな犠牲を払いながらも苦戦の末に、旅順を占領し、1905(明治 38)年 3 月には奉天会戦に勝利すると、攻勢の限界であるとの認識の下、満州軍は奉天北方の鉄嶺というところで堅固な防衛態勢を敷き、講和を有利に成立させるために海軍の勝利に期待が寄せられます。ロシアは劣勢をはね返すために本国からバルチック艦隊を派遣し、艦隊は 1905 年 5 月、インド洋からマラッカ海峡を経て極東を目指していました。これを迎え撃つ日本の連合艦隊にとっては、バルチック艦隊がどこにいるのか、そして、どのようなコースをとってくるのかが大問題であったのです。東郷司令部においても、バルチック艦隊をどのようにして待ち受けるかについて幕僚たちの意見が分かれ、その緊張感は、日を追って高まっていきます。こうした時に、日本人で初めてバルチック艦隊を発見したのが、沖縄県宮古島の漁師たちでした。しかし、宮古島には通信施設がなく、石垣島まで使いを出す必要があったのです。このとき、宮古島の久松地区に住んでいた 5 人の若者が、一刻も早く大本営に知らせなければと、この役目を引き受けました。交通手段は丸木舟のみであり、荒海を 15 時間、170 キロを必死に漕いで石垣島の海岸にたどり着き、さらに 30 キロの山道を走り、八重山通信局に飛び込んだといいます。この 5 人は、「久松五勇士」として、今でも宮古島に石碑があります。こうして、バルチック艦隊の存在が、大本営に伝えられ、連合艦隊司令長官東郷平八郎(写真)に対馬海峡を通過するという確信を与えることができたのです。



東郷平八郎
海軍大将

1905(明治 38)年 5 月 27 日、東郷司令長官は「敵艦見ゆとの警報に接し、連合艦隊はただちに出動、これを撃滅せんとす。本日天気晴朗なれども波高し」という作戦参謀秋山真之の起草した電報が打たれます。引き続いて、東郷司令長官から発せられた Z 旗が旗艦「三笠」のマストに掲げられ(写真)、「皇国の興廢この一戦にあり各員一層奮励努力せよ」に



旗艦「三笠」

よって、戦闘の火ぶたが切られます。戦闘は翌朝まで続き、38隻のバルチック艦隊は、沈没21隻、降伏6隻、武装解除6隻、本国に逃げ帰ったもの2隻、ウラジオストックに着いたのが3隻であり、日本側は水雷艇3隻を失いましたが、軍艦の沈没はなく、世界の海戦史上空前の大勝利でした。